

## 第5章

# ディスカッション活動・事後活動セッション



# 1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

## (1) 目的

ディスカッション活動は、(1) 各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めると共に、(2) 率直かつ活発な意見交換を通じ、相互理解の促進、集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせると共に、参加青年（PY）に事後活動への具体的な活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

## (2) テーマ

本年度のディスカッション活動・事後活動セッションにおける共通テーマは「青年の社会活動への参加」とし、その下に8つのグループ・テーマを設けた。PYは、グループ・テーマごとに各国ほぼ同数で構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

### a. 共通テーマ 「青年の社会活動への参加」

青年は、リーダーとして社会の活性化と発展に寄与する役割を担っている。各参加国での青年の社会活動への参加の実情を理解し、様々な分野において青年が貢献し得る活動について討議することによって、青年自らが社会参加の重要性を再認識し、PYの事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目指す。

### b. グループ・テーマ

- ① 青年の起業
- ② 異文化理解促進
- ③ 環境（自然災害と防災）
- ④ 食育
- ⑤ 保健教育（HIV/AIDS対策）
- ⑥ 国際関係（日・ASEAN協力）
- ⑦ 学校教育
- ⑧ 情報とメディア

## (3) 実施方法

### a. ディスカッション活動

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定し

た。所属DGの決定後には、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、「日本・ASEANユースリーダーズサミット」（YLS）及びグループ・テーマに関連した課題別視察を実施した。PYは、日本国内で別途募集した日本人参加者（ローカル・ユース、LY）と共にYLSに参加し、DGごとに、YLS用のディスカッション・テーマに則して、ファシリテーターのアドバイスを受けたコーディネーター（YLS実行委員）の先導で、ディスカッションを行った。

船内活動では、導入プログラムにおいて各国の具体的な社会活動事例の発表を行った後、DGごとに、ファシリテーターの指導を受けながらグループ・ディスカッションに参加した。各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、また、各DG及び各国で選出されたディスカッション活動運営委員がファシリテーターを補佐した。

ベトナム訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、グループ・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における「青年の社会活動への参加」についての認識を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業後に社会活動を行う際に必要な具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取組方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。その後、DG別にファシリテーターとディスカッション活動運営委員が進行役となり、ワークショップ形式により、具体的かつ実践的な企画・立案の演習を行った。

各DGは、成果発表会において討議内容の成果発表を行うとともに、ディスカッション・レポートを作成した。

### b. 事後活動セッション

事後活動セッションIでは、各国事後活動組織代表者が全体会を実施し、各国事後活動組織の連携組織であるSSEAYPインターナショナルについて紹介すると共に、その目的・活動状況についての理解を深め、PYのSSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去のPYが事業中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況・成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。

事後活動セッションIIでは、国別に各国事後活動組織代表者が進行役となり、各国における事後活動組織や過去のPYによる活動状況や事例について理解を深めた。

(ミャンマーについては、NLとディスカッション活動運営委員を中心に行った。)

事後活動セッションIIIでは、国別にPYが事後活動と

して各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取り掛かった。

事後活動セッションIVでは、国別に事後活動セッションIIIで出てきたプロジェクト案を更に具体化し、完成させ、また、帰国報告会に向けた発表の準備を行った。

(4) ファシリテーター

ディスカッション・グループ	氏名	国名	性別
青年の起業	源 飛輝	日本	男
異文化理解促進	Eugene C. Sosing	フィリピン	男
環境 (自然災害と防災)	Nguon Pheakkdey	カンボジア	男
食育	Jaya Pradeep Krishnan	マレーシア	男
保健教育 (HIV/AIDS対策)	Berzenn Urbi	フィリピン	男
国際関係 (日・ASEAN協力)	Grace Hutasoit	インドネシア	女
学校教育	Randy Santos Magdaluyo	フィリピン	男
情報とメディア	Devianti Febriani Faridz	インドネシア	女

(5) 各国事後活動組織代表者

国名	氏名	事業参加年	性別
日本	犬尾 陽子	2006	女
ベトナム	Le The Hien	2010	男
タイ	Kritsada Punyapratheep	2008	男
カンボジア	Duong Khemara	2012	男
シンガポール	Tang Kwok Hoong	2007	男
インドネシア	Eka Esti Susanti	2006	女
ブルネイ	Nurul Raine Binti Haji Bunal	2011	女
ラオス	Senkitchanuluck Lattanaxai	2008	女
マレーシア	Mohd Firdaus Bin Ghazali	2006	男
フィリピン	Cabañero, Renee Lynn Melad	2010	女



各国事後活動組織代表者

【プログラムの流れ】

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
↓		
日本国内活動	10月30日～11月2日	日本・ASEANユースリーダーズサミット
	10月31日	グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月5日 11:30～12:45	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出)
	11月5日 14:15～15:30 11月6日 10:00～12:45	第1回、第2回ディスカッション活動運営委員会 (ディスカッション活動の運営方法の協議、導入プログラムの準備)
	11月7日 14:15～17:00	導入プログラム (ディスカッション活動の主旨・実施方法等の説明、 共通テーマに基づいた各国の社会活動事例発表)
	11月8日 10:00～12:45 11月9日 10:00～12:45 11月10日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションI グループ・ディスカッションII グループ・ディスカッションIII
↓		
ベトナム 訪問国活動	11月12日	グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月16日 10:00～12:45 11月17日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションIV グループ・ディスカッションV
	11月22日 14:15～17:00	事後活動の企画・実践に向けての導入
	11月23日 10:00～12:45	事後活動の企画・実践に向けたワークショップ
	11月24日 10:00～12:45	まとめ
	11月25日 10:00～12:45	成果発表会の準備・DG毎のレポート作成
	11月30日 10:00～17:00	成果発表会
	12月1日 10:00～12:45	自己評価
↓		
船内 事後活動 セッション	12月7日 10:00～12:45	I (全体会) (SSEAYPインターナショナル及び各国事後活動組織の活動事例紹介)
	12月8日 10:00～12:45	II (国別) (事後活動組織と既参加青年による活動の紹介)
	12月10日 10:00～12:45	III (国別) (各国で取り組んでみたいことや プロジェクトについての議論及びプロジェクト案の作成)
	12月11日 10:00～12:45	IV (国別) (プロジェクト案の完成、帰国報告会での発表準備)
	12月14日 16:00～17:30	帰国報告会 (国別にプロジェクト案の発表)

## 2 ディスカッション活動・各グループのレポート

### (1) 青年の起業グループ

ファシリテーター: 源飛輝

PY: 40名

#### A. 焦点、目的、ゴール

##### 焦点

日本とASEAN各国における社会と起業（ビジネス）の関係や現状を理解し、その上で、社会及び経済を活性化する観点から、社会としてどのような取組が必要か、また、青年自身もどのように取り組むことができるかについて議論し、発表する。

##### 目的

- 青年がいかに経済的及び社会的な貢献を起業家として成し得るのか、また青年が他の青年に対してどのように起業を促すことができるのかを理解する。
- 今日における青年の起業について、成功率を向上するための大局的な視点や独自の意見を持つ。
- 青年の起業の良い面を知る。例えば、自らの企画や製品を通じて、若くして社会に対し発言力を持ち、また実際に大きな影響もしくは貢献を及ぼし得ることなどが挙げられる。（一例として、マーク・ザッカーバーグ氏。）

##### ゴール

- 日本及びASEAN各国における青年の起業に関する代表的事例について知る。
- 青年の起業が世の中でより広がっていくための戦略的な実行計画を立案する。
- 起業家精神や新規事業について、継続的かつ具体的な議論に耐え得るだけの知識を習得する。

#### B. 事前課題

##### 個人課題1

自国における起業家の成功例と失敗例について、当事者の背景など総合的に情報を含めた上で、分析レポートを書くこと。

##### 個人課題2

青年起業家として、投資家から出資を引き出せるだけのビジネス又はプロジェクトの提案書を作成すること。

##### 個人課題3

堅調な成長を阻害しないため、自国の現状下で起業家もしくは事業体によってなされている企業努力の実例を紹介すること。

#### 国別課題1

自国において、新規にビジネスを立ち上げる際に有用な外的環境や利用可能な制度について、パワーポイントでプレゼンテーションを作成すること。

#### C. 活動内容

##### 日本での課題別視察

施設: パクチャーハウス東京

「世界青年の船」事業（内閣府主催）の既参加青年により設立され、人々が自らの経験を分かち合い交流するためのより良い場所作りを企図されている。ファウンダーかつ代表者の佐谷恭氏は、コリアンダー（タイ語では「パクチー」）料理専門店であるパクチャーハウス東京と、コワーキングスペースとを経営しており、また氏は人と人が繋がる仕組みとなる「ソーシャルマラソン」、別名「シャルソン」の推進にも積極的に注力している。

##### 活動

まず、PYは経堂の商店街を散策し、複数の店舗や店主への聞き取りをする機会を得た。ここでは、日本PYの通訳のもと、複数のビジネスモデルや店の歴史の一端を知ることができた。

次に、佐谷氏から起業家精神についての自身の考えや、パクチャーハウス東京とコワーキングスペースのビジネスコンセプト、またシャルソンについて講義を受けた。その後、氏はいかに夢を実現したかについて語り、PYに対して起業家的世界に与するすすめを説いた。氏はまた、コミュニティへ貢献し、還元することの重要性も強調した。

##### 視察から学んだこと

PYは以下のような学びを得た。

- PYは佐谷氏の情熱に感服した。起業家は、自らの夢や考えに強い情熱と信念を持たねばならず、また重要なことは、行動によりそれらを目に見える形にしなければならぬことである。
- ビジネスコンセプトの創造性や独自性が市場における差別化要因を生み出す。
- PYは、日本におけるオンラインビジネスの動向や、技術が人々の生活様式をいかに変容し得るかについて理解を深めた。
- 成功するためには、起業家は既存の枠組みにとらわれず発想し、巨視的な考察に努めるべきである。



## グループ・ディスカッションI：各国における起業家の

### 成功例と失敗例

#### ねらい

日本及び東南アジアにおける実際の事例研究により、起業家の成功と失敗の鍵となる要素を見出す。

#### 活動

PYは異なる国によって構成される6人ごとのグループに分かれ、個人課題に基づいて自国の起業家の成功例と失敗例について共有及び議論を行った。その後、各グループは全体に対してそれらの結果を共有し、最後に、起業家を成功もしくは失敗させる鍵となる要素について議論を重ねた。

#### 成果

成功と失敗の双方につき多種多様なビジネスの事例を共有したことで、PYは日本及び東南アジアにおけるビジネスの勝因や敗因にはいくつかの共通点や相違点が存在することが分かった。

キーワードとしては以下のものが挙げられる。

#### 成功要因：

- ・ ローカルな施策とグローバルな企画
- ・ 強固なネットワーク
- ・ 持続可能性
- ・ (技術)革新
- ・ 機会志向
- ・ 明確な目標やゴール

#### 失敗要因：

- ・ 提携や協業
- ・ 市場調査
- ・ 人事管理
- ・ 財務管理
- ・ 注力や情熱の不足
- ・ 創造性の欠如

PYはビジネスの成否に関わる新たな知識と有用な情報を得ることができ、事例研究や議論から導かれたこれらの成功要因や失敗要因は、11の参加国におけるビジネスにほとんどの場合適用可能なものであるとの意見で一致した。また、11の参加国から集まったPYのプレゼンテーションからは、主には文化や歴史的な相違に起因するであろう、世界の中でも日本や東南アジアにおける経営戦略や様式の特徴が垣間見られた。

## グループ・ディスカッションII：ビジネスの提案

#### ねらい

- a. 青年起業家となることを疑似体験し、有望なニッチ市場や新しいビジネスモデルを見つけ出し説得力あるプレゼンテーションに落とし込むことがいかに困難かを実感する。
- b. 投資家の視点を理解する。

#### 活動

- a. PYは個人課題に基づき、青年起業家として各々自らのビジネス又はプロジェクトを投資家(その他のPY)に向けて提案し、質疑応答を行う。聴衆は、鋭く厳しい質問を以て極力批判的であるように心掛ける。
- b. PYは上述の活動からどのような教訓を得たかを話し合う。

#### 成果

PYは、起業家となりビジネスの提案を行うというのはどういうことなのかを体感し、また、提案の仕方にも独特で効果的なものがいくつも存在することを学んだ。現在、そして将来にかけて役立つだろう創造的なアイデアや戦略を数多く知ることができた。

質疑応答では多くの異なる角度からの質問を通じて、出資してもらえるよう投資家を説得することや、優れた強みを持ちながら大した弱みも見当たらないようなアイデアを捻り出すことがいかに難しいかをPYは思い知った。投げかけられた質問は、投資家の思惑及び発表されたビジネスモデルの弱点を映し出す上で重要な役割を果たした。

以下、提案されたビジネスプランをいくつか例として挙げる。

- a. Nae Gardenia Café  
屋上庭園型のカフェで、ケーキや飲料と共に落ち着いた雰囲気を提供する。
- b. CUMASEWA  
オンライン上で多種多様な物品の貸し借りができるアプリケーション。
- c. Smart guitar  
初心者に対して、より簡単にギターを弾き方を習得させるためのガイド・ギター。
- d. Sports for happiness  
スポーツを苦手とする人を特に対象としたスポーツクラブ。
- e. Ragpet  
多様な種類と色を選択できる可愛い人形。囚人の手により製造される。
- f. Music unleashed  
一般の人々が自らの音楽や歌を発表し共有できるプラットフォームを作るプロジェクト。
- g. ArMa  
上の世代から知識や知恵を集め引き継ぐためのアプリケーション。

## グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

青年起業家が実際に又は潜在的に必要としているものとは何か(堅調な成長を阻害しているものとは何か)を考え、理解する。

**活動**

- a. グループ・ディスカッションIIに対しての追加的フィードバック：  
ファシリテーターは、グループ・ディスカッションIIにおいてPYにより発表された全てのビジネス提案に対して、建設的なフィードバックを行った。当該フィードバックは、各提案の長所のほか、コンセプト作り、市場分析、ビジネスモデル、プレゼンテーションなどにおける改善点につきなされたものである。
- b. 小グループによるディスカッション：  
PYは、異なる参加国からなる6~7名の小グループに分かれて、個人課題に基づき、自国の現況下でより上手くビジネスを行うために起業家がどのような努力を払っているかについて報告及び共有した。その後、PYは青年起業家が実際に又は潜在的に必要としているものとは何かにつき議論を重ねた。
- c. グループ・プレゼンテーション：  
PYは、小グループ毎に模造紙を使いながら、思い思いの方法やデザインによって上述のディスカッション結果につき発表した。グループによって異なる意見が存在していたため、各発表における質疑応答は白熱したものとなった。

**成果**

ビジネスを上手く行うために起業家が注力しているものとしてPYは主に5つのことを学んだ。

- a. 資金調達：新規事業の資金調達先は多岐に亘る。例えば、自己資金、ベンチャーキャピタル、政府による資金援助、借入れ（銀行やマイクロファイナンス）、個人による資金援助、ビジネスコンテストの賞金などが挙げられる。
- b. 採用活動：合同就職説明会や、人材募集（オンラインや直接働きかけることもある）、個人的なネットワークなどを通じて、適材適所の採用を行う。
- c. 人事管理：多くの事業体では、有用な人材を留めるために職業訓練や奨励金、報奨を提供している。
- d. 営業及びマーケティング：売り上げを増加させ、成功裡に製品やサービスの販売促進を行うため、起業家は展示会に赴き、ソーシャルネットワークを駆使し、有名人の起用や自らがトークショーに出演することも厭わない。個人の人脉を広げることもビジネスを強固なものにするための手段となり得る。

**ベトナムでの課題別視察**

**施設:** トン・ドゥック・タン大学

ベトナムの国立大学であり、地元行政と民間企業による合同プロジェクトが運営されている。

**活動**

PYは本学から熱烈的な歓迎を受けた。本学の学生たちによるキャンパスツアーの後、ホーチミン市を拠点とす

る起業家及び地元行政から2つのプレゼンテーションを受けた。最後に、PYはプレゼンターや地元青年と共に青年の起業につき議論し、その成果を短いプレゼンテーションにして発表した。

**視察から学んだこと**

- a. ベトナムの起業環境。
- b. ベトナムの家計支出においては、食料品や飲料品が最大で、通信や旅行・行楽が最小であること。
- c. ベトナムの人口増加：推計では2060年までに人口がASEANで2位、世界で10位になり、ベトナムの市場としての魅力は潜在的に大きいこと。
- d. 外国人にとってベトナムで起業する事業機会。例えば、低い労働コスト、新規市場や潜在市場の創出が挙げられた。
- e. ベトナムの学生による複数の起業アイデア
- f. 本学構内では学生が製造した商品が販売されている店舗があり、利益の80%が当該学生に、20%が店舗に振り分けられる。このように、学生に創造させ、そこから利益を生じさせることで学生の起業を奨励している。

**グループ・ディスカッションIV****ねらい**

各参加国におけるビジネス環境と各種制度について理解を深める。

**活動**

PYは国ごとにグループ分けされ、自国におけるビジネス環境、起業家にとって利用可能な政府などによる支援や享受可能な事柄、起業するにあたっての既存の制度などにつきプレゼンテーション及び質疑応答を行った。

**成果**

PYが初めて知り得るような情報が多く紹介された。興味深い例としては、ブルネイの税制が挙げられた。他国と異なり、ブルネイは基本的に課税がなく、所得税すら発生しないため、起業家を含め、企業に非常に優しいものと言える。その他の例としては、日本PYにより紹介されたイントレプレナーが挙げられる。これは、自らが従業員として雇用される企業の内部で起業して事業を営む者を指す。そしてPYは、伝統的・典型的な起業家とイントレプレナーとの比較検討に強い関心を示した。

**グループ・ディスカッションV****ねらい**

DGでの学びに基づき、他の青年にビジネスやプロジェクトを始めることを促進する実行計画を策定する。

**活動**

これまで4回のセッションと日本及びベトナムでの課題別視察からPYが何を学んだかを概観した後、PYは国ごとのグループに分かれ上述の命題につき議論し、それ

ぞれの結論につき全体で共有及び質疑応答がなされた。

## 成果

PYにより提案された実行計画のほとんどは、いまだコンセプト作りの段階を脱しきれていないものの、2か国による共同プロジェクトが複数見られ、またPYからは本件に関しより創造的に取り組んで行こうとする姿勢が見られた。各案については更なる改善が見込まれるものと思料する。提案された実行計画は以下のとおりである。

### 日本：

#### Japan Project Management

ソーシャルネットワークシステムを使用して、起業についての情報を提供することを企図する。また、このプロジェクトにより、PYは他の青年に対して第43回「東南アジア青年の船」事業のDG1における活動と経験を共有する。

### マレーシア及びカンボジア：

#### Young Entrepreneurship Bootcamp

青年の起業を促し、ビジネスで生き残るための技能の提供を企図する。本キャンプにより、青年は独自のビジネスプランを作り上げ、実行に移す機会を得ることになる。

### フィリピン及びラオス：

#### Joint Project of the Philippines and Lao P.D.R.

ブートキャンプ形式などの集中的なトレーニングにより、日本及びASEAN各国の青年に起業を啓蒙し、社会における変革者となるよう育成することを企図する。

### ミャンマー：

#### Open your ideas

ダウェイ地域の青年に対して創造的なビジネスを生み出すことを促し、セミナーやワークショップを施すことで起業家になるための支援を企図する。

### ブルネイ：

#### B-Yes

起業に関するメディアとして、起業に対して知識のある地方の青年をより多く生み出し、積極的に起業関連の活動に取り組みさせることを企図する。

### シンガポール及びタイ：

#### Business for good

専門的なトレーニングにより青年を触発し、起業家精神やビジネススキルを習得させることを企図する。これにより、社会問題を解決するビジネスの創出に貢献することが望まれる。

### ベトナム：

#### The seed

主に青年層向けの国営テレビ局であるVTV 6において放映されるリアリティー番組の制作を企図する。これにより、ベトナムにおける個人がチームビルディング、ビジネスの提案、資金調達、特に初期段階における企業文

化の醸成などに関するビジネスにまつわる技能や知識を向上させることに資する。

### インドネシア：

#### #EntrepreneurshipClinic

より多くの、特に低所得地域出身の青年起業家を創出するために、高校生に対して起業家としての技能を身に付けさせ、3つの集中的トレーニングを通じて、青年起業家と繋げることを企図する。

## D. 決意・期待される今後の活動

国ごとの事後活動とは別に、PYはDG1の事後活動として、以下のような発案を行った。これもまたコンセプト作りの段階にあり、より一層の検討と改善を必要とするだろうが、PYは青年の起業の促進について一定の効果を達成せんと強く志している。

DG1のチームは、日本やASEAN各国における青年起業家のネットワークと繋がりを強めるため、トークショーやシンポジウムといったイベントの開催を考えている。ここでは、人々が起業家界で最新のトピックについて議論し、新しく若い起業家と出会えることを志向している。これは青年に対して、その場における複数の活動を通じて他の若い起業家たちと交流する機会を提供するものである。また、成功した起業家たちによるセッションを通じて、社会起業の促進も企図している。

さらに、社会問題をビジネスで解決するトレーニングとなるセッションもしくはワークショップも予定されている。このイベントが日本及びASEAN各国において、青年の持つアイデアを形にし、青年の描く未来像を円滑に実現するため、必要となる政府のネットワークと青年とを引き合わせるプラットフォームとなることに繋がれば理想であるとPYは考えている。

## E. 評価・反省（自己評価セッション）

幸いなことに、ほとんどのPYにとって個人的な目標が達成され、当初の期待が満たされる結果となった。主な例として次のようなものがあった。

- 起業に関心があり、自らの経験や洞察、情報などを継続的に共有できるような友達のネットワークを日本及びASEAN各国に構築すること。
- 11の参加国から集まった、ビジネス全般、ビジネスによる解決、そして起業家精神についての知識や感覚を吸収すること。
- 価値観や考え方、職業観や人生観、そして青年が特に産業界から社会に対して何をすべきで何ができるのか、といった事柄について意見を共有・交換すること。
- ディスカッション、プレゼンテーション、英語によるコミュニケーションの能力を向上させること。



## F. ファシリテーター所感

DG1の事前課題は相対的に重めの内容であったが、締切日に間に合うようPYが頑張ったことに対し、大変喜ばしく思う。この課題の分量については、なにも徒にPYに対し酷ならんとするものではなく、ファシリテーターなりの考えがあつてのことだった。

「青年が他の青年に対してどのように起業を促すことができるか」や「青年の行動力や革新的なアイデアを活用できる社会を青年はどのように構築することができるのか」といった命題を前にして真剣に向き合おうとした場合、最低条件として、プロジェクトチームや新規事業における一般的なビジネスもしくは人材資源管理に関する問題につき概要を掴み、深く考察できていなければならないだろう。そうでなければ、ボールの蹴り方すらも知らないのにいきなりサッカー選手のコーチをするようなものである。さらに、最終的にしっかり地に足の着いた実践的で実りある事後活動を設計かつ実行したいと欲するのであれば、これはやはり避けて通れない要となるのだ。とりわけ、青年の起業とはディスカッションに入る前にきちんとした準備が必要となるテーマである。PYの中にはビジネスを専攻し、MBAを取得した者までいた。しかし、必ずしも全てのPYがビジネスに明るく、自らのプロジェクトや新規事業を運営する際のイメージが適切にできているわけではなかった。そこで、ディスカッション活動を通してファシリテーターは、PYにとって1)ベンチャー企業の取締役となるのはどういうことか、また2)起業家が多くの場合直面する困難とは何か、といった事柄につきより良く理解できるように、基本的な情報を与え、正解の存在しない実際のケーススタディーを使用し、ファシリテーター個人の経験談を共有してPYに追体験させて補足し、手引きした。その際、事前課題はPYのディスカッション内容をより実りあるものとし、PYの足並みを揃えることに資する非常に良い準備として機能した。

さらに、ほとんどのPYにとって英語は第一言語でなく、その流暢さもPYによってまちまちである。これにかんがみ、必ずしも英語に自信のない者であっても、ディスカッション中に発言できるようにという意図があつたのである。そのために、事前にPYには準備万端の状態でもらい、自らの意見や発言の元となるものを手元に資料として持っているようにしてもらわなければならない。そしてその資料こそが、事前課題というわけである。

最終的にはPYもこの方針に感謝し、事前課題に基づいた準備を最大限活用してディスカッションを楽しむことができたことと述べてくれて、喜ばしい限りであった。

日本及びベトナムでの課題別視察は、PYに良い印象と衝撃をもたらすものとなった。なぜならば、それぞれの国において現役の起業家たちと会う機会に恵まれたか

らである。彼らは親切にも自らの生き立ちや哲学を我々に共有し、PYはここでの会話を通じて多くの気付きを得ることができた。最も印象に残っている言葉として、以下のものがある。「学び続けなさい。そして成功する準備を整えなさい。青年の時間というのはいつでも、値を付けられないほどの資産です。この資産を使って得られる利益とは失敗の経験です。この失敗の経験こそが将来の成功の度合いを決めるものなのです。即座に成功を手にする者など、ほとんどいません。概して、我々は個人の目標と社会の利益からなる自らの夢を形作ることに青年の時間を使うべきです。我々のほとんどは結局のところどうせ失敗に陥ることになります。しかし、それはまだ見ぬ成功のためのより大きな教訓を学ぶことになります。そして同時に、我々は社会に対して大いに貢献していかなければなりません。」課題別視察を通じて、PYは起業家スピリットを感じることができたことであろう。これら起業家による話は、PYによるディスカッションのためのケーススタディーにもなり、ブルーオーシャン戦略などのビジネス用語を使いながら解説することにまで繋がった。

船内のディスカッション活動では、起業に関して多くの国で異なる印象や認識に基づいたPYの様々な意見を集めることができた。このことはディスカッションを「東南アジア青年の船」事業ならではの真に刺激的で独特なものにしてくれた。というのも、参加国によって歴史的、文化的、経済的もしくは社会的な前提が異なるからである。そしてこのような環境下で導き出された気付きというのは、ディスカッションを真の意味で有意義なものにしてくれるのである。

PYのディスカッションは、今日の「フォーチュン100」企業と50年前のものを比較することから始まった。PYは、リストに残り続けているのはほんの数社だけであり、7割以上の企業に至ってはもはや市場に存在すらしないということを知った。PYは、産業は常に新規参入者、変革者、革新者を需要し新陳代謝を求めていると結論付けた。アマゾンやアップル、フェイスブックにグーグル、アイ・ビー・エムにマイクロソフト、そしてホンダやパナソニック、ソニーといった例を挙げるまでもなく、現在重要な巨大企業は、どれも元々はベンチャー企業だったのであり、(青年の)起業家精神の賜物であつたのだ。そしてファシリテーターとしては、起業家精神やビジネスについて様々な視点や異なる側面からPYに質問を投げかけることを意識した。

さて、DG1のPYが共通認識として合意できたものは以下のようにまとめられる。どの社会においても、新たな産業が勃興することに大きな期待を寄せている。例えば、日本においては、安倍政権の経済政策である「アベノミクス」で強調されていることの一つに、社会や経済を活性化するために起業の促進が数えられている。ま

た、サウジアラビアでは、石油に過度に依存している経済から脱却するため起業の促進に前向きである。

しかしながら、多くの場所では、新規に会社を設立し経営していくことは個人にとってリスクが大きすぎるとして、潜在的に優秀な人材が挑戦することを敬遠しているような感がある。青年にとって、起業するには必ずしも状況や環境がきちんと整っていないとの指摘もされている。これについては、リスクマネーの供給や適切な情報の不足、先例や良いモデルケースの欠如、果ては、独立起業することは「負け組」や「あぶれ者」の選択肢として見られるくらいなどが当てはまると言えるのではないだろうか。

これにかんがみると、社会ではどのような手立てや資源が必要となるだろうか。PYの認識では、起業家にとって理想的な場所の一つである米国のシリコンバレーに見られるような、エコシステムを作り上げることが必要である。シリコンバレーで何が起きているかという、（若者を触発している）スタンフォード大学やUCバークレー、カリフォルニア工科大学といった研究機関が技術革新や新しい技術の供給者として機能し、周囲に存在する数多くのベンチャーキャピタルは常にこれら産業の種に出資しビジネスのノウハウを教える用意がある。そして出口戦略としては、グーグルなどの大企業が絶えず興味深く有望なベンチャー企業をM&Aの買い手として探し回っている。このような正の循環が築かれており、労働市場は活発かつ健全で、失敗したベンチャー企業の従業員にとって強固な受け皿として機能している。それに加えて、財務や法務にとどまらず、その他多くの分野でもベンチャー企業の支援を専門としたプロフェッショナルなサービスが存在している。挑戦者に好意的で再挑戦者にも優しい風土と上記が相まりシリコンバレーが究極的に提供しているものとは、失敗するリスクを減少させるところにある。そしてこの失敗するリスクこそ、人々に夢を追いかけることを躊躇させ、経済や社

会の長期的な活性化を妨げているものなのである。よって、起業について、特に青年の起業について地に足のついた現実的な取組みをしたければ、鍵は失敗するリスクをいかに抑止するかに求められよう。

上記の考え及びプロジェクト・マネージメント・ワークショップでのトレーニングに基づき、PYは事後活動のための現実的で効果的な計画の策定に奮闘した。主には時間が足りなかったことから、いまだ改善の余地は大いにある。ファシリテーターはPYよりも早く下船しなければならないため、PYが各国事後活動組織代表者（OBSC代表者）の指導の下、どのように計画を洗練させていくかを目にできないのは残念である。さはさりながら、ファシリテーターはDG1のメンバーが良い働きを見せてくれるものと信頼し、素晴らしい勢いをこの後減ずることのないように祈念している。個人的な考えとしては、起業家とは絶えず試行錯誤と付き合っていくかねばならない人々のことだと思っている。そして、PYには大いに試行錯誤を経て、最終的にプロジェクトを成功に導いてもらいたい。

本事業で私は一貫して、倫理観、志、展望の重要性を強調してきた。真の革新的ビジネスには、ただ金の勘定といったことだけでなく、社会について熟考することが必要なのではないだろうか。これは、私が「起業家と事業所有者の違いは何か」とディスカッション中に質問を投げかけた時にPYから寄せられた答えの一つでもある。

私の目には、DG1のPYがただ単に有能というだけでなく、優れた心を持ち合わせているように映った。各々のビジネス及びプロジェクト提案のプレゼンテーションからは、各々の情熱を感じる事ができた。その上で申し上げると、PYに必ずやビジネス領域に進んでもらいたいわけではないものの、どこに進むにせよ、いつも心に起業家精神を持ち、育み、社会にとってプラスな驚きを引き起こす活躍をしてくれることを切に願っている。



## (2) 異文化理解促進グループ

ファシリテーター: Mr. Eugene C. Sosing

PY: 43名

### A. 焦点、目的、ゴール

#### 焦点

参加青年は多文化共生社会を確立することを最終的な視野に入れ、青年が異文化理解促進のために何ができるかについて話し合う。このトピックは家族関係や地域の社会文化的慣習などのような身近な問題を取り上げる。PYはディスカッションに基づいた実現可能な活動計画のプレゼンテーションを行う。

#### 目的

PYは個人の違い、相違点に気づきを得ること、そして自分自身と違う文化の知識、尊敬や理解を得ることができる。ディスカッション活動ではマクロ視点での、そして地域という限定された小さな社会における文化間の多様性に重点を置く。ディスカッションの最後には、PYはそれぞれが属する社会で更に異文化理解を促進するための実現可能な計画を提案するためのスキルと知識を得ることが期待されている。

#### ゴール

- PY同士で異文化理解の基本概念とどのようにそれらを人間の欲求階層に関係させるかについて話し合う。
- PYは異文化理解促進の役割を明確にするためにPY同士で異文化理解適用レベルを探求する。
- 日本での、またASEAN諸国での異文化理解促進のための最良の実践を共有し、多文化共生社会の重要性を繰り返し認識する。
- 異文化理解促進の問題、必要性の診断、そして介入の優先順位について把握する。
- 船内での異文化理解促進関連の活動と実現可能な行動計画の提案をする。

### B. 事前課題

#### 個人課題1

自分のことをよく説明できる一番好きな文化的なものと一緒に写真（セルフイー写真）を撮ること。文化的なものというのは、洋服や食べ物、芸術、工芸品、ジェスチャー、シンボルなどのことである。

それについて、それがどのように自分を表現するものなのか説明をつけること。

#### 個人課題2

ディスカッション・セッションの後に到達したい目標の知識、スキル、そして資質についての発表を準備すること。自分のディスカッション活動での取組と決意もワードテンプレートの課題に書き加えられた。テンプレートの最後には自分が望む多文化共生社会についての理解について書くこと。

レート

#### 個人課題3

インターネット上に記述された事柄を選択して答える形式の適正診断を受けること。これによって自分のコミュニケーション、評価、説得、リーダーシップ、決定、信任、意見の不一致、そして時間管理の面における文化的見解を明らかにするものである。

#### 国別課題1

各国は、コミュニティや職場、家族の慣行や伝統的な習慣で、外国人から誤解されやすい事柄を描く2つの写真を提出すること。その慣習のいきさつを示し、社会的な失態（外国人の誤解による）がどのように地元の人々に影響するか説明をつけること。

#### 国別課題2

各国は、3分間の動画を使ったプレゼンテーションを準備し、グループ・ディスカッションIIIで発表する。プレゼンテーションはそれぞれの国の事後活動組織、既参加青年、青少年団体が行う最も素晴らしい活動に焦点を当てて紹介すること。

プレゼンテーション内容は異文化理解の点を含み、対象となる人々への強い影響と介入を盛り込むこと。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

視察先: 横濱中華學院 (YOCS)

#### 活動内容

PYは横浜市の中州街にある横濱中華學院 (YOCS) を訪問した。YOCSは日本にある最も古い中華学校の一つである。PYは校長先生の学校の理念や精神、学校の歴史についての話で歓迎された後、自由討論を行った。グループに分かれて中国、台湾、そして英国といった様々な背景をもつ高校生と交流した。最後には生徒たちが中国伝統の獅子舞を披露し、PYを感動させた。

学んだこと

- a. 学校のカリキュラムに中国語、日本語、そして英語を取り入れていることを学んだ。
- b. この学校で過去に実践していることのうち、良かったことや、いくつかの困難な経験を共有した。
- c. グループ・ディスカッション交流で、YOCSで学ぶ生徒たちの経験について学んだ。



## グループ・ディスカッションI

### ねらい

- 文化的なものを発表することを通じて他文化に親しみ、認識することでPY間の繋がりを作ること。
- ディスカッションに対する期待値を共有し揃えること。
- 基本的な異文化理解促進の定義、その重要性、人間が根本的に必要とするものとのつながり方について話し合うこと。

### 活動

- それぞれのPYは自分の文化的なものと一緒に写る自分の写真（セルフ写真）（個人課題1）を、どのようにそれが自分の特徴と独自性を象徴するのか説明する時間を与えられた。
- PYはグループに分かれ個人課題2のディスカッション活動への期待、決意、成功させるための貢献から、優先順位をつける作業をした。各グループ2分でまとめの発表をした。
- PYは文化的氷河（文化の目に見える部分と見えない部分）といった異文化理解の基礎を学び、それらを欲求階層と関連付けた。異文化理解の概念への適応としてPYは異文化シミュレーションに参加した。2つの異なった文化的な価値観と習慣のグループ、アルファとベータに分かれた。この表は2つの文化の違いである。

グループA	グループB
「バファ」という言葉が野蛮な意味	「バファ」は通貨の名前
家族が尊ばれる	ビジネスが尊ばれる
話す時に人との距離が近い	個人空間を尊重する

両方のグループがこれらの行動に基づいて触れ合い文化的な違いと衝突を経験した。

### 成果

- PYは自分たちの写真を見せあった後、お互いの文化の類似点と違いを比較し、理解することができた。続いて行われるファシリテーターによるディスカッションで、PYは文化とは何か、そして多文化、異文化、文化間交流の違いについて共通理解にたどり着いた。更に、PYは無形の、そして有形の文化価値について学び、PYはそれぞれの文化に感謝と尊敬を抱くことができた。
- PYはディスカッション・テーマの目的と比較して、自分たちの期待を明確に意識した。期待事項のうち、セッションの中で取り上げられない事柄は、もしセッション以外で時間があれば取り組むこととした。PYの決意と貢献については次回のセッションで

再確認することとした。

- 活動のハイライトでは、PYは類似性、異なる言語、非言語の間違ったとらえられ方、偏見が原因でミスコミュニケーションが起こることに気付かされた。それに加え、個人の絶対に譲れないことと妥協できることの境界線を示すことが2つの異なる文化が妥協点を見つけるために大切である。異文化理解促進の定義は マズローの欲求階層と関連づけられた。PYはそれぞれの階層が文化的視点を意味すると学んだ。彼らはそれが信条、慣習といった大きな意味での特定の個を作るものに依拠して存在するということが更に認識した。

## グループ・ディスカッションII

### ねらい

- 日本での課題別視察とホームステイの体験からの学びから、ディスカッション活動と関連付けて意見交換すること。
- PYの異文化意識と感受能力を評価すること。
- 特定のスキルと能力、そして更なる異文化理解の上で向上させる必要があるスキル、能力を認識すること。
- 困難や状況において、異文化理解におけるPYの役割を生み出すこと。

### 活動

- PYは8つのグループに分かれ、ホームステイと課題別視察での体験における、社会文化活動や家族との関係に焦点を当てた質問に答えた。PYは自分たちが慣れ親しんだことと比較しながら家族関係、視察先について類似点と相違点を話し合った。
- PYは個人課題3の解説を受け取った。その結果によって、活動中に「自分が（線上で）どこに立っているか」という明確な見地の解釈の上で自分について認識し準備した。
- PYは4つのグループに分かれた。異文化理解促進に影響するプラスの特徴とマイナスの特徴についてとり上げた。プラスの特徴は強みとされ、マイナスの特徴は弱点とされた。
- PYがそれらを明確にした後、自分たちのコントロールが及ばない強みと弱点に影響を与えるいくつかの要素をリストに上げた。弱点は障害として考えられる一方で、強みの要素は機会としてとらえられた。全ての答をSWOC図（強み、弱点、機会、課題）に記入した。

### 成果

- 家族関係はASEANと日本では少なからずとも類似しているということが分かった。全ての文化において年配の人に対して最上の敬意を払うことに大きな価値がある。それに加えて、ASEAN各国では男女間の格差とそれに対する意識が徐々に実行されている。



- b. コミュニケーション、評価、説得、リーダーシップ、決定、意見の相違、スケジュールなど、特定の文化的視点に関して、自身の文化と異なる国・文化について把握した。PYによっては、自身の国の共通する文化的な特色とは異なる視点を持っていた。PYの異文化理解と感受性の意識は、旅行、メディア、テクノロジーそして周りの環境への触れ方により多岐にわたる。
- c. PYは異文化理解促進において影響を与えるであろう、多くのPYが持ち得る強みと弱点を特定することができた。それらのいくつかは、コミュニケーションスキル、興味、確立されたネットワーク、そして日本とASEANの文化についての知識である。PYがコントロールできない要素についても上げられた。ポジティブな要素は機会であり、ネガティブな要素は課題となる。いくつかの共通する要素は、ASEANの統合、グローバル化の問題、社会メディアの流布、機関の優先、異文化間主導権の政策である。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 職場、地域や家族における文化的な誤解を分析すること。
- b. 職場、地域、旅行の際、そして決まった状況シナリオに基づく留学といった状況における異文化理解促進の影響について話し合うこと。
- c. 異文化理解促進の日本、ASEANにおける最良の慣行を発表し、多文化共生社会の重要性を浸透させる。

活動

- a. 文化マップ： それぞれの国が、国別課題1を使い、外国人に誤解されやすい自国の習慣や伝統的な慣習を2つずつ発表した。PYは誤解の理由と現地の人々にそれがどのように影響するのかについて説明した。

ブルネイ	チャンダス (Chandas)、アンブヤ (Anbuyat)
カンボジア	クモを食べる (Aping)、コインで治療する民間療法
インドネシア	耳たぶを伸ばす女性 (Wanita Dayak)、ミイラ (Budaya Manene)
日本	「すみません」(同じ単語で謝罪と感謝を表す)、本音と建前
ラオス	アルコールを皆で飲むことが和を表す、ロケット祭り
マレーシア	ハリラヤのお墓参り、ウェイターを「ボス」と呼ぶ
ミャンマー	男子の成人式パレード (Shinlaung)、仏塔崇拜

フィリピン	フィリピン時間、食べ物のテイクアウト
シンガポール	席とり (Chope)、過度の行列
タイ	教室での活発な文化
ベトナム	男性優位社会、中国との類似文化

- b. ビデオ上映： 4つの異文化理解に関連した社会問題のビデオをグループに見せた。それらは、難民、急進化、男女平等、そしてグローバル化についてである。
- c. PYはそれらがどのように社会問題に影響を受けているか、また、その影響を少なくするために、どのように関わることができるかについて話し合った。
- d. 国別課題2： それぞれの国は自国の事後活動組織、既参加青年や青少年団体が行う最良の異文化理解促進の活動について動画で発表した。それぞれの国の発表後に質疑応答が行われた。

ブルネイ	「青年の文化ムーブメント」若者たちの間で文化意識を生み出そう
カンボジア	「世界遺産ユースフォーラム」
インドネシア	「Sabang Merauke」寛容、インドネシア青年ムーブメント
日本	「カルモニー (Culmony)」子供向け無料英語レッスン
ラオス	「多様性ボヤージ」日本とラオス間での文化的な考え方の共有
マレーシア	「オープンハウス」人種間の融和を育てる
ミャンマー	「フードフェア」食を通じて異文化理解
フィリピン	SSEAYPインターナショナル・フィリピンと事後活動組織
シンガポール	「チンゲイ祭」人種ハーモニー・デイ
タイ	「ナコーンラーチャシーマー・ラーチャパット大学青年大使」
ベトナム	大学での文化交流

成果

- a. PYは特定の文化的な慣習の理由についてより良く認識した。さらに、親しみのない新しい文化慣習についても学んだ。PYは、日本とASEAN各国の間でお互いに持つかもしれないマイナスイメージを減らすために、透明性が重要であるということに気付くことができた。
- b. 最初に上映した急進化におけるビデオを通して、PYは急進化の原因を特定することができた。主となる

原因の一つは、例えば就労の機会など、青年が社会を前進させることに貢献する機会が十分でないことである。二つ目の難民に関してのビデオでは、PYは難民の生活やどのように彼らが他の国に溶け込むのかということ意識した。グローバル化の利点についてのビデオでは、グローバル化がどのように言語、文化、ビジネスを促進させるかという点においてPYの見解を広げた。最後の男女間格差に関してのビデオは、PYの意識を高め、学校、職場そして地域において見られる男女間のギャップ（溝）を無くすことの重要性を理解した。

- c. 男女間の格差（男女の参画）は日本とASEANのほとんどのPYが影響を受ける共通の問題である。今でもある状況下では存在する。世界が一つになろうとするのに伴い、グローバル化は進む。PYは文化的な点で高い意識を持つこと、そして自分たちの社会への学びを分かち合うことを決めた。これらによって、PYは周囲の人々に影響を与える。難民、そして急進化はPYが話し合ったことに関連がある。PYは将来に対して、世界の不均衡のせいでそういった方向へシフトしている傾向があるというリスクを抱えている。PYは一つの国での問題は近隣諸国と関連しているということに気付いた。それゆえ、介入は関係者と協力して文化的なことを考慮に入れて行われるべきである。
- d. このセッションの結果として得られた考えは次のセッションに非常に重要である。PYの題材に対する理解を形作り視野を広げる手助けとなった。
- e. それらのプレゼンテーションを通じ、PYは11の国の慣習を知ることができ、類似点ばかりでなく、相違点も判断することができた。PYはお互いに介入しあうことを学び、自国で応用する可能性のための繋がりを持つことができた。このことによって彼らは、類似した活動を事後活動で行うやる気を与えられた。同じようにPYはDGの仲間たちから問題解決のスキルをも学んだ。

#### ベトナムでの課題別視察

訪問先：ホーチミンシティ人文社会科学大学

#### 活動

PYは人文社会科学大学を訪問した。ここでは、異文化理解をどう促進するかについて地元の大学生たちと短いディスカッションをした。そのあと、彼らはグループで彼らの考えのまとめを発表した。全ての発表の後、大学の副学部長が総評をくださった。総評の後、国際交流クラブ（IEC）が彼らの組織の活動と理念を発表した。IECは、2012年3月26日にホーチミン共産青年同盟の下に設立された青年組織で、青年が文化交流イベントに参加したり、自身の向上の足掛かりとなったりすることを目

的としている。その後、ベトナムの伝統的なゲーム、書道、帽子の飾りつけなど様々な文化を実際に体験した。

#### 学んだこと

- a. PYは異文化理解促進を取り入れる際における価値観、態度、知識について話し合った。プレゼンテーションは次の3つのポイントにまとめることができる。(1) 刺激を与える：グローバル化を最大限に生かしたお手本を通じ伝統的な文化を広める。(2) 情報提供：異文化コミュニケーションを促進する文化交流活動を行う。(3) 調和：新しいことを学ぶことに興味を持ち、互いの違いを尊敬すること。
- b. PYは異文化理解促進におけるIECの活動について学んだ。この組織は青年のネットワークを広げること、多文化の知識を押し進めることに中心を据え、コミュニケーションスキルと人的なスキルを向上させるための存在として活動している。

#### グループ・ディスカッションIV

#### ねらい

- a. ベトナムでの課題別視察で感じたこと、学んだことをディスカッション活動の内容と関連させて話し合った。
- b. 異文化理解促進に関係する問題を、はっきりとした原因、実現可能性と影響に応じ優先順位を、選択されたツールキットを使いながら確認すること。

#### 活動

- a. グループ・ディスカッション： PYは小グループに分かれベトナムでの課題別視察の学びを話し合った。自分自身の地域、学校、職場などで親しみのある経験との類似点や相違点について話し合った。そして、その後のディスカッションに役に立つポイントに関連させた。
- b. ツールキットワークショップ： PYは国ごとにグループに分かれ、日本とASEANの異文化理解促進に関係した問題と原因について、石川フィッシュボーン（特性要因図）を用いて話す課題を与えられた。そこでそれぞれのグループはスパイダー図を使って影響力、実現可能性、方策、関連性に基づいたプロジェクトに優先順位を付けた。

#### 成果

- a. 課題別視察は、PYがベトナムの文化、国際交流クラブ、そして異文化理解促進の方法を深く理解するのに役立った。異文化理解促進の活動と良い慣行を学ぶことは次のディスカッションへ関連していった。
- b. 石川フィッシュボーン（特性要因図）： このセッションはPYを国ごとに分けることから始まり、その国で存在する問題、そしてそれらをつなげている根底の原因を含め、問題を特定するために行われた。それらの問題はスパイダー図に落とされ、切迫する

問題、そしてPYが自ら介入できるものに優先順位がつけられた。これらからPYは自国での一定の問題を確定することができたので、意識を向上させ、自分たちが解決のために介入できるプロジェクトを計画した。

ブルネイ： 伝統文化に対する理解の欠如

カンボジア： 学校で学ぶことができる機会の男女間格差

インドネシア： 地方の田舎における意識の低さ

日本： 様々な背景を持つ人々との交流が限られるため、他の文化に対して興味がない又は少ない

ラオス： 地方の学校での日本とASEANに対する知識の欠如

マレーシア： 小学校で、3つの主となる文化の統合（調和）がない

ミャンマー： 大学生の若者の間で地方の文化に対する理解がない

フィリピン： 恵まれない先住民族の人々に対する誤解

シンガポール： 若者の間での日本とASEAN文化の理解の欠如

タイ： LGBT（性的マイノリティ）に対するメディアの受け取り方の低さ

ベトナム： 青年の異文化コミュニケーション力の欠如

### グループ・ディスカッションV

#### ねらい

- 異文化理解促進に関する特定の問題に基づく、対策を提案する。
- 船内及び事後活動で実施する、問題解決のための介入に選ばれた活動を計画する。

#### 活動

- ワークショップの結果は確認された異文化理解促進の問題への介入を提案することに活用された。PYはグループ全体に対して、事後活動テンプレートを使って発表した。ファシリテーターとPYのコメントは、今後事後活動がより現実的に、そして恩恵を受ける人々に継続的な影響を与えることを達成できるよう考慮された。
- 船内活動ディスカッション： PYは4つのグループに分かれ、船内活動で可能な計画を考え、他のグループに発表した。スパイダー図は船内活動で最も人気がある活動を選ぶために使われた。
- 事後活動ディスカッション： PYは国ごとに分かれ、事後活動で可能なプランについて話し合った。

#### 成果

- 11か国全てが異なった、それぞれの国の問題とその原因を含んだフィッシュボーンモデル（特性要因図）を作った。
- 11か国は11の異なったプロジェクト提案をそれぞれまで

のワークショップや材料をもとにまとめた。それらの提案は社会の様々な分野、例えば、青年育成、先住民教育、文化理解、男女のエンパワメント、そして日本、ASEANの文化意識向上などである。提案には異なった形での実行方法、公共のイベント、青年キャンプ、セミナーワークショップ、そして長期のプロジェクトなどが挙げられた。

#### 船内活動ディスカッション

グループ1： See you, See Me

PYは目隠しされ、無作為に男女ペアにされ、特定のトピックについて3分間話す。この活動はPY同士の垣根をなくし、お互いに見えない文化的な特徴に注目しながら繋がりを作ることを目的としている。

グループ2： 異文化理解の日

それぞれの国での文化的な誤解についての写真について話し合われる。ねらいは、PYにASEANと日本の国々の違いと類似点について理解してもらい、相互理解を得ることである。

グループ3： 国際理解の日

プロム・ダンス・ナイトのような集まりである。PYは異なった国の人々がデートの相手となる。これは異なる文化間でPYが心を開くことを向上するであろう。そして、ネットワークを広げるチャンスにもなる。

グループ4： 語学教室

語学教室ではPYは新しい言語の基本的な表現を学ぶ。

船内活動は、プロジェクト提案テンプレートを用いて作成した。しかし、インフルエンザの流行や時間不足が原因で実施されなかった。それでも、それぞれのPYが計画の時点でしっかりと貢献していたことが重要である。PYは実用的なスキルと知識を計画段階で活用することができていた。協力と努力によって互いに尊敬と理解を生み出したことで異文化理解の環境がPY同士の中で作り出された。

#### D. 決意・期待される今後の活動

これまでのディスカッションとワークショップでの結果に基づき、次に述べる事後活動が今後の活動として提案された。

マレーシア： ワルナワルニ・カーニバル

地方の青年がこのカーニバル中に文化発表とパフォーマンスに取り組むという提案である。イベントの参加者は5つの小学校から参加する。

タイ： レインボープロジェクト

LGBTコミュニティが社会活動に貢献するとともに、地域社会でイメージを向上する土台を作り出すための教育的かつ社会活動を兼ね備えたトレーニングキャンプである。

ベトナム： V体験キャンプ



この7日間のトレーニングキャンプは、ハノイの大学生が、様々な交流活動を通じて異文化理解コミュニケーションスキルを向上するためのものである。このプログラムは地元青年と外国の青年の間の理解、関係を強化することを目的としている。

#### ブルネイ： 青年文化ムーブメント

第41回「東南アジア青年の船」事業既参加青年との共同で、PYはブルネイの異なる民族と文化的な芸術を披露する活動を企画する。

#### ラオス： レッツゴー・ジャセアン (J-ASEAN)

このプロジェクトは地方に住む学生に、日本とASEANについて基本的な言語と伝統について書かれた読み物を提供し教育するというものである。ラオスの事後活動組織と共同で行う。

#### カンボジア： 女子を学校へ

このセミナーは教育機会が限られた女性と若い女の子に向けたものである。NGOやほかの組織と協力し、女子のグループにより良い教育機会への支援をする。

#### インドネシア： 読み聞かせ (Nusantara Bercerita)

このプロジェクトはインドネシアの28の州で文化教育をすることを目的とする。実行は2017年の第1四半期を目標にしている。

#### 日本： 世界を発見

このプロジェクトは学生がもっと他の文化に興味を持つよう促すことを目的とする。SNSを通して、また直接会って経験やライフスタイルを共有したり、互いに理解を深めたりする。

#### ミャンマー： 文化理解タイムCAT

このプロジェクトは若者間の文化への理解を促進するものである。大学生の文化への意識を高めることを目的としている。

フィリピン： 「Dap-ay」祭 (Dap-ayとはお年寄りが若い世代に知識を分け与える集いの場のこと)

この祭は一般の人々を、文化や先住民族の伝統を文化パフォーマンス、先住民族の音楽、ダンス、ゲームのセミナー、ワークショップを通じて教育することを目的としている。

#### シンガポール： アメージングA.J.レース

この教育プログラムは6歳から14歳の子供たち向けで、シンガポールと近隣諸国の知識や理解を向上することを目的とする。

PYは、全ての事後活動が次の共通の方向性に従うように企画することに同意した。「理解される」ことを理解しよう。違いを祝福しよう。」これは彼らが事後活動を実施する際に主導していく際に共通の理念となるであろう。

#### E. 評価・反省 (自己評価セッション)

評価の結果はPYの返答に応じている。1から5 (5が最高) のスケールで全体の平均3.8の評価を得た。これはディスカッションのねらいに達成できたかということに基づいている。以下は5つのディスカッションにおける、あるPYの学びと振り返りの感想からの抜粋である。

セッション1： 「他の文化を受け入れることと、一方で自分のアイデンティティを保つことの重要性を学んだのは開眼される思いだった。」

セッション2： 「異なった考え方が他の文化を理解することに心を開かせてくれた。」

セッション3： 「異文化理解促進の問題として興味を持ったことの一つが、男女間の格差である。状況は自分の地域でも改善してきているが、しかしまだ文化的な側面を理由に女性が男性と同様の機会は平等ではない。意識を高めることと、公平性を擁護することによって、そのギャップを埋めることができる。」

セッション4： 「異文化理解促進をより実用的に、そして現実的な方法で考える手助けとなる。」

セッション5： 「ワークショップ活動によって、文化的な境界を解決する方法を思いついたり、また異文化理解促進を進めたり、皆が協力的になれる。」

詳しい評価結果は図1に表されている。記入者の中で、ツールキット関連が一番高評価を得 (4.26—平均以上)、50%のPYがこの活動が実現可能な事後活動を作っていくのに役に立つ、と同意している。SWOC (強み、弱点、機会、課題) の戦略解析では彼らの事後活動の計画で最も役に立つのはツールキットである。65%の高評価を得た。次いで、石川フィッシュボーン (特性要因図) (22%)、スパイダー図 (15%)。



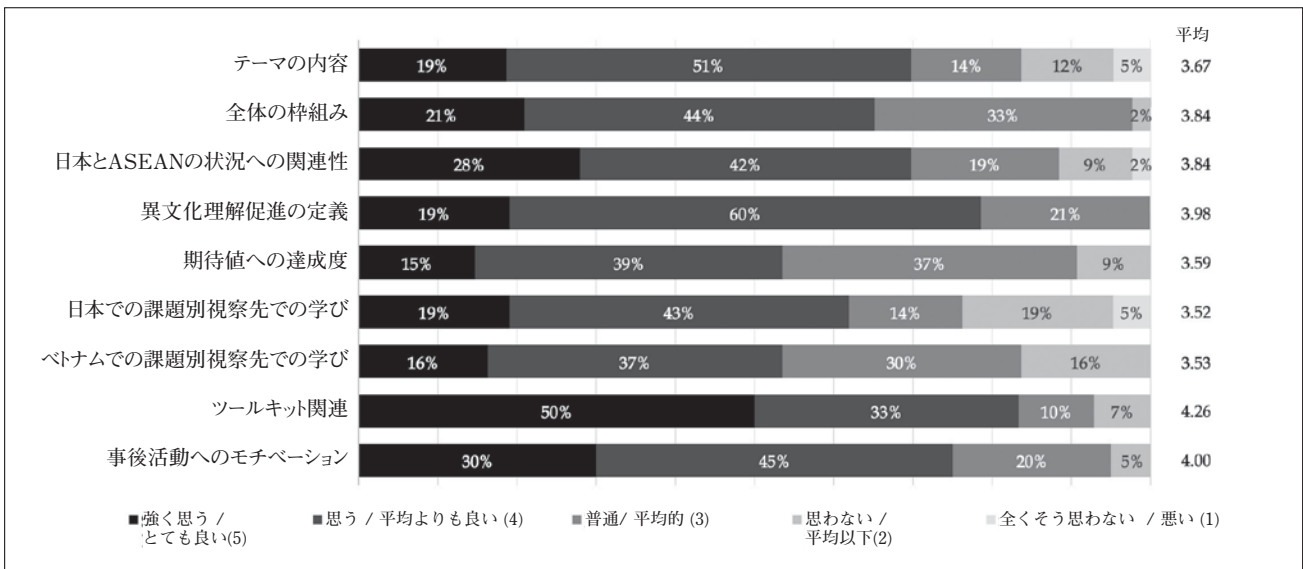


図1

大変多くのPYが事後活動のアイデアを多く得ることができたと述べた。評価の結果を基にすると、次に挙げる内容は、異文化理解を促進していく際に役に立つ事柄としてPYが得た知識、スキル、価値、そして態度のトップ5である。(1) 文化の多様性、(2) 日本とASEANの類似点と相違点、(3) 異文化理解促進の概念、(4) 尊敬、(5) 心を開くこと。PYはそれらを自分たちの地域に帰って、多文化共生社会を促進する上で異文化の学びを統合していく際に、分け与えることを熱望している。

#### F. ファシリテーター所感

DG2のディスカッションの枠組みのデザインは、世界の中で現在の日本とASEANの関係がどのように位置づけられるかという状況と関連するテーマに焦点を当てている。ディスカッションのサブトピックは、PYが異文化理解促進に最大限に活発に取り組むようになるよう理論的に考えられた方法であり、最終的に実現可能で持続可能な事後活動に結びつくことである。これは最初のセッションから共通理解を持つという異文化理解促進の基本定義も含む。それは、日本とASEANの異文化理解促進に関連する問題や慣習といったマクロ見解に向かう前に文化のミクロ見解、自分の意識に触れている。ツールキットワークショップは現実的な事後活動を生み出すことと、継続的な影響力を受益者が得ることができるというニーズに対応するためにPYの助けとなるべく組み込まれた。

それぞれのPYの様々なバックグラウンドや知識のレベルの違いを考慮に入れてディスカッション・セッションを作るのは困難もあった。知識が豊富なPYとそうでないPYのバランスを無理にとらなければならないこともある。私は、PYが刺激を受け、考えを共有するとともに、様々な考えのやり取りをすることに取り組むことができる環境を作ることを実践しなければならなかった。このことから、それぞれのPYの経歴などの基本情

報が事前の情報の一部としてファシリテーターに提供されたら有効であったと思う。

私は現在のディスカッション活動の流れは素晴らしいと思う。以前よりも多くが改善されている。2011年のファシリテーターとして提案したことが、今回の事業で実現されていたことが嬉しかった。強調されたのは、事後活動の企画・実践に向けたワークショップ、課題別視察での交流、導入プログラム、そして事後活動セッションへの引継ぎである。また、シンガポールからインドネシアまで和田昭夫内閣府青年国際交流担当室長が乗船され、ディスカッション活動の成果発表会と自己評価セッションに参加していただけたことは光栄だった。内閣府の担当室長が乗船されるのは初めてのことだと聞いている。これは、この事業におけるディスカッション活動の重要性を強調する出来事である。

今年のファシリテーターグループの力がディスカッション活動の成功に貢献した。今年度のメンバーはそれぞれのディスカッション・テーマをリードする専門性を持っていた。豊かな経験をもつファシリテーター経験者と、比較的最近のPYでファシリテーターになった人とが、担当の管理部門のサポートのおかげでスムーズに(特に初参加の人には役立った)プログラムが実行できた。

私がディスカッション・セッションで用いたいくつかの方法をPYが利用して、彼ら自身で実験的学びを率いていることを嬉しく思う。彼らのチェックポイントに基づき、活動場所、PYの状況、ディスカッションのペース、船内での資源の入手状況に合わせ、いくつかの活動の内容を改訂した。小グループのディスカッション、引導質問、そして作文の共有といったシンプルな方法はPYが活動中に交流する際に大きな影響を与え、ディスカッション活動の経験を豊かにする。これはとりわけ、コミュニケーションスキルや自信の面で困難を感じる人々にとってうまく適応する。PYの性格を知っておく

ことができると、セッションに向けて力量を測ることに役立ったであろう。

全体として、私は第43回「東南アジア青年の船」事業のDG2の活発な参加と協力に対して、高く評価をしている。大人数のPYとほぼ26時間、ディスカッションの間に直接的にしっかりと向き合い、ディスカッションの舵取りをすることはとてつもない技が必要である。青年たちが自分たちの能力を最大限に発揮する中で、情熱に火をつける役割の一助を担えたのは、とても光栄である。私には、現世代の青年リーダーがそれぞれの社会で良い変化をもたらす触媒となる可能性が、彼らの中に見える。私たちは、彼らが将来のリーダーであるということと同時に、現在も自分自身の分野で既にリーダーであるだろうと想像することすら容易である。彼らは、地域の中で変化を起こす担い手となるのに若すぎるということはなく、周りの人々、そして恵まれない人々にとってもその効果が広がっていくであろう。

夜遅くまで準備をしたり、様々な優先すべきことを後回しにしたり、自分の居心地の良い場から離れたり、といったこと全ては、この事業に再び参加することと引き換えにする価値のあることだ。これは、私なりのこの事

業への貢献である。この事業は私の世界の見方を変え、より広い意味での人間関係の概念を教えてくれた。私は、社会で影響力を持つことに貢献し活発に活動する11,000名もの人々を生み出してきたこの事業を向上させたいという気持ちでいる。

この場を借りて、以下の皆様にお礼を申し上げたい。日本政府内閣府、（一財）青少年国際交流推進センター、SSEAYPインターナショナル・フィリピンからは私にDG2を任せてくださることへの信頼をいただいた。中村かおり管理官以下、管理部の皆様には円滑なプログラム運営のために大変な尽力をいただいた。ファシリテーターの仲間は、ディスカッション活動の成功のためにそれぞれの専門性を分け与えてくれた。久保滋弘船長以下、にっぽん丸乗組員の皆様には安全で快適な航海への御尽力をいただいた。各国事後活動組織と日本及びASEAN各国政府には確固たるサポートをいただいた。ホームステイ家族の皆さんにはPYに家を提供し、各国の文化を紹介していただいた。そして、この事業を43年間にわたり、成功に導くためにお力を貸して下さった全ての皆様に感謝を申し上げたい。

Maraming Salamat po!



### (3) 環境（自然災害と防災）グループ

ファシリテーター: Dr. Nguon Pheakkdey

PY: 39名

#### A. 焦点、目的、ゴール

##### 焦点

日本とASEAN各国における自然災害と防災への取組の現状を把握し、災害の被害を少しでも減らし、安全で安心して暮らしていける社会をつくるためにどのような取組が必要かを議論する。それを基に、「東南アジア青年の船」事業後に実行可能な活動案を発表する。

##### 目的

ディスカッション活動によって、参加国において現在よく見られる自然災害や防災の国際的枠組について、理解と知識を深める機会を提供する。自らも参加できる、災害リスクを減らす既存事業について認識し、自国で自ら実施可能なプロジェクトを作り上げる。

##### ゴール

- 防災と災害救助の概念を理解する。
- 防災のために作られた兵庫行動枠組と仙台防災枠組について知る。
- 日本、ASEAN各国、世界における災害救助の試みや防災に対して青年が果たし得る重要な貢献について認識する。
- 防災や災害救助事業における取組や教訓、その中でも特に青年の参加があったものについて知る。
- 自国でよく見られる災害について、防止に資する意識向上運動を成功裏に企画・実行できるようになる。

## B. 事前課題

### 個人課題1

例えば地震、干ばつ、台風、洪水など、自国で最もよく見られる災害を1つ選び、その影響について調べること。その災害の自国における社会的、経済的又は環境的な影響についてコメントすること（150～300ワード）。自らの調査結果を裏付けるような、関連する統計情報を引用することが望ましい。

### 個人課題2

個人課題1で選択した災害についての意識を醸成させるために自国でなされた事業を1つ選ぶこと。例えば、個人課題1で地震を選択した場合、自国で地震に対する意識醸成に取り組む政府もしくは国際機関による事業につき調べることが求められる。

### 個人課題3

個人課題1で選択した災害をいかに防止するかについて得られた教訓を最低5つ挙げること。

### 国別課題

各国ごとのグループで、自国における防災や災害救助における青年の参加を促すことを主題としたキャンペーン・ポスターを作成すること。その際、キャンペーンについては以下の情報を必ず含むこと。

1. キャンペーン目的
2. 目的達成のための活動を最大5つまで
3. キャンペーン実行の時間枠
4. 期待される成果

## C. 活動内容

### 日本での課題別視察

**施設：**一般社団法人防災教育普及協会

**活動：**講義

日本及びASEAN各国で起こり得る様々な災害への対処法に関する30分間の講義から始まった。その後、地震発生後最初の30秒間から3年間にわたる自らの災害対策計画及び行動を策定した上で、台本に基づいた活動を行った。火災から地震に至るまで各種災害において取るべき措置につき具体的指示の書かれた東京防災と題する黄色い冊子を講師から1人1冊渡された。プレゼンテーションの後、2つ目の課題別視察へと赴いた。

#### 視察から学んだこと

- a. 日本で頻発するいくつかの自然災害、またそれらの日本社会や経済に及ぼす影響について知った。
- b. シンガポールPYを始め一部の者にとっては、自然災害に遭遇したことがなくこのような行動計画を目にすることもなかったため、当該活動は教育的で新鮮なものとなった。

- c. 概してPYは講師によるプレゼンテーションを楽しんだ。しかし、台本に基づく活動をより取り入れ、そしてPYから提案された災害対策計画を読んだ上で模範例もしくは正解例を提示していただければ、更に参加型なものにすることができたと述べた。

**施設：**池袋防災館

**活動：**体験学習

PYは池袋防災館の歓迎を受けた。日本で発生した様々な自然災害について日本の学生がどのように学んだか、それが社会にもたらしたもの、そして青年がいかに防災や災害救助に加わることができるかについてのビデオ鑑賞から始まった。PYはそれから2つのグループに分かれ、各グループはセンター職員の指導で3つの疑似体験活動を行い、修了証書をいただいた。

#### 視察から学んだこと

- a. 課題別視察を経て、自然災害や実生活で緊急事態においていかに自らを守るかについて知識や技術を得ることができた。短編ビデオを通じて、地域や学校において防災意識を向上させることの重要性を知ることができた。
- b. 特に小さな子供に対する意識向上運動においては、更なる関心と理解を引き出すために視聴資料の使用が一助となるとPYは述べた。
- c. 地震の疑似体験により、自らを守るための基礎的な技能を身に着けることができた。
- d. 「このように唐突で困難な状況下、特に地震の発生中、人は動きづらく考えづらくなり、適切な判断を下すことは難しい。センターでの疑似体験で、自分と家族のために自国での災害発生に備えた『伏せ、覆い、じっとする』原則の重要性を学ぶことができた」とはフィリピンPYの弁である。
- e. PYはまた、消火器の正しい使用法を教わった。最後の演習は煙に満ちた迷路での疑似体験であり、火災の際いかに適切に避難するかを教わった。「消火器訓練と煙に包まれた疑似体験によって、火災時の対人対物被害の最小化に資する消防訓練の重要性を理解することができた」とはインドネシアPYの弁である。
- f. 「センターで得た付加的な知識と技能により、災害や緊急事態の被害を防ぎ、また唐突で困難な状況下でも適切な判断を下し、落ち着いた行動をとることができるようになった」とマレーシアPYは総括した。

### グループ・ディスカッションI

#### ねらい

- a. 11月5日のグループ別ミーティングで設定したDGにおける基本ルールを再確認する。
- b. 日本での課題別視察に関する振り返りを行う。



- c. 日本及びASEAN各国で頻発するいくつかの自然災害について知る。
- d. 災害が日本及びASEAN各国の、社会及び経済状況に与える影響につき議論する。
- e. 兵庫行動枠組と仙台防災枠組における行動の優先順位につき分析する。

#### 活動

- a. 11月5日に行われたグループ別ミーティングで定めた基本ルールを再確認した。その内の一つは、DGセッションは協力的な精神に基づいて行わなければならない、競争的な環境であってはいけない、というものだった。各セッションは、PYが能動的となれる機会を与える安全で尊重し合える環境でなければならない。
- b. ゲスト講師による講義と池袋防災館への訪問からなる、日本での課題別視察に関し振り返りを行った。
- c. PYは国単位で計5つのグループに分かれ、個人課題1を用いて日本及びASEAN各国で最も頻発する自然災害につき議論し特定した。PYは自国でよく見られる自然災害について議論する時間を与えられた。自国の自然災害に関する図画や目立つ数値を含めたポスターを作り、各グループは3分間で発表を行った。
- d. アイスブレイク： この目的は、全てのPYが議論に積極的で集中できるようにし、また互いの文化について理解して更に知ることである。インドネシアPYによって主導された。
- e. PYは兵庫行動枠組と仙台防災枠組を紹介するビデオを視聴した。ファシリテーターはビデオの後、要約を述べ、この2つの国際的な枠組の歴史や重要性を説明した。
- f. PYは6人ごとのグループに分かれ、これら枠組について評価し建設的なコメントをするために、両方の枠組における行動の優先順位について概観し議論した。
- g. 1人の自発的なPYがセッションの総括を行った。

#### 成果

- a. PYは、全員がDGの活動に能動的になれるよう、DGセッションは安全で尊重し合える環境にあるべきだと同意した。
- b. 地震、洪水、地滑り、噴火や台風など、日本及びASEAN各国でよく見られる災害について知り、理解した。日本及びASEAN各国での自然災害の現状、それが人々と環境そしてその他の側面に対し与える影響について学んだ。
- c. いかにグループで協働し意見交換するかを学んだ。
- d. 災害に対する実用的な解決法や効果的な手段について理解し、特に各種自然災害にどう対応するかに関し、より心構えができた。
- e. 兵庫行動枠組と仙台防災枠組という自然災害に対する国際的枠組に定められた目標や目的、行動の優先順位について学習した。PYは2つの国際的枠組の重

要性と、気候変動に関する国際連合枠組条約や新しく打ち立てられた17の持続可能な開発目標など他の枠組との関連性につき理解した。

- f. 概して、PYは国同士の提携と相互支援は困難な時期、つまり災害からの復興時に大きな違いを生むことを学んだ。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- a. グループ・ディスカッションIの要約。
- b. アジア太平洋地域における防災に関する概念や実際の課題について理解する。
- c. 日本及びASEAN各国における自然災害防止事業について認識する。
- d. 災害対策計画を策定する。

##### 活動

- a. 1人の自発的なPYがグループ・ディスカッションIの要約を行い、要点をおさえた。
- b. PYは5つのグループに分かれ、最初の日本での課題別視察時に渡された東京防災の冊子から出題される一連のクイズに対し回答を競った。
- c. アジア太平洋地域における防災に関するビデオを視聴した後、PYはその要点を振り返った。ビデオで言及されていた国出身のPYは発言を求められた。
- d. PYは「効果的な防災には制度、提携、動機が必要となる」と述べられたビデオの主な結論につき、同じグループで議論した。
- e. アイスブレイクがフィリピンPYの主導で行われた。
- f. PYは同じグループで台風についてのビデオを視聴し、その後、台風の事前、最中、事後に関する災害対策計画の策定を求められた。各グループの発表後、フィリピン政府公認の実際の計画のコピーが渡された。
- g. 1人の自発的なPYがセッションを総括した。

##### 成果

- a. 兵庫行動枠組と仙台防災枠組について再認識した。
- b. クイズを通じて、洪水、地震、火災など、日本及びASEAN各国にとって最頻発の自然災害の際に、自らを守る異なる手段について学んだ。
- c. 防災とは、自然災害による影響の減少に資する活動のことを指すと理解した。これには、適切な意識向上活動や、効果的に策定され十分に検証された災害対策計画が含まれる。
- d. PY、特にビデオで言及された国出身の者は、専門家によって示されたアジア太平洋地域における防災の提携努力に対する課題に同意した。
- e. 効果的な防災には、行政のレベルを超えた組織的な取り決めや調整である「制度」、様々な政府・非政府の利害関係者による包括的な関わりを指す「提



携」、そして利害関係者の参加を維持・強化させる経済的・非経済的な「動機」が必要になることを学習した。

- f. 台風の科学につき理解した。台風の前、最中、後になされる活動に焦点を置いて、台風の災害対策計画をどう下書きするかを学んだ。
- g. フィリピン政府公認の台風の災害対策計画について学んだ。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

- a. 災害救助の概念と、それらの努力をまとめる際の課題について理解する。
- b. 日本及びASEAN各国における現在の災害救助について認識する。
- c. ネパールや中国での地震、そして東日本大震災における災害救助の実例を紹介する。
- d. 災害救助への青年参加を阻害する課題や、その潜在的な解決策を皮切りに、災害救助における青年の役割について議論する。

#### 活動

- a. 1人の自発的なPYがグループ・ディスカッションIIの要約を行い、要点をおさえた。
- b. ネパールでの壊滅的な地震に対する災害救助の努力をまとめる際の課題について、国際連合首席広報官へのインタビューを観た。
- c. 個人課題2の結果を用いて、自国の災害救助について分かったことを5人ごとのグループで共有した。
- d. 実生活における災害救助の努力について、ビデオを2つ視聴した。一つ目は、東日本大震災の被災者に対する国際的な努力についてのものだった。二つ目は、ネパールと中国での地震の被災者に対する、7歳のアメリカ人の子供による募金を通じた支援努力についてだった。
- e. アイスブレイクがミャンマーPYの主導で行われた。
- f. 災害救助の事業を実施ないし関わる際に直面する青年の課題について、災害救助に関わった経験を持つPYが個人的な教訓や見解を共有した。それらの課題とは、専ら青年を参加から妨げる要素についてのものだった。
- g. そしてPYは全体で、青年に災害救助事業への参加を促す際に考えられる解決策を提案した。
- h. 1人の自発的なPYがセッションを総括した。

#### 成果

- a. 災害救助の努力をまとめる際の課題について、国際連合首席広報官へのインタビューを観た後、現場で起こり得る課題や問題、またそれらの問題に対して講ずる手段につき学習した。
- b. 個人課題2の結果を共有したことで、日本及び

ASEAN各国で現在進行中のいくつかの災害救助事業につき学んだ。また、各国における異なる政府・非政府組織と提携する際に、推奨及び実行できる新たな方法や解決策を特定することもできた。

- c. 一つ目のビデオからは、壊滅的な自然災害が発生した際、政治的相違にかかわらず国際的コミュニティは支援の用意があることを学んだ。人道的な理由から、災害の結果、互いの相違を超えて人々が一つになることができると学んだ。
- d. 二つ目のビデオからは、年齢にかかわらず誰もが災害救助の努力の輪に加わることができることを学んだ。7歳のテキサス州の少年の例はPYに対して、自分の行動がどれだけ小さなものに思えようが、災害時には何か行動を起こすのだという気にさせた。
- e. 年齢や性別にかかわらず、青年は防災と災害救助の両方において不可欠な役割を果たすことを学習した。
- f. 概して、このセッションを通じて、PYは効果的な防災と災害救助事業を有することの重要性を実感した。また、これらの事業がどうして国家目標や予算配分において優先され、含まれているのかについても理解した。

### ベトナムでの課題別視察

**施設：** ノンラム大学環境・天然資源学部

**活動：** ゲスト講義及び地元青年との交流

ノンラム大学では、Le Quoc Tuan教授から講義を受けた。講義では、水、環境、自然災害、気候変動について、特にベトナムそしてその他の国々についての状況を中心に新しい知識を得た。その後、PYは計10のグループに分かれ、地元青年と水、環境、自然災害、気候変動に関連する主題につき議論及びポスター制作の準備を行った。各グループはポスター発表の機会を得ることができ、最後にPYと地元青年は昼食を共にし、ホームステイマッチングの場に向かった。

#### 視察から学んだこと

- a. 講義では、災害、水、環境、気候変動や関連事項における科学的なつながりについて学習した。PYは水と気候変動との密接なつながり、そしてベトナムにおける問題点について学んだ。ゲスト講師は主にベトナムや他の国々における気候変動や水関連の問題による影響、またそれらに対する緩和策や適応策の提唱に力点を置いていた。
- b. 地元青年とのディスカッション・セッションでは、水の大切さ、水処理に関する先端技術の発展、水力発電の影響、気候変動に起因する水関連の災害、気候変動への適応、水質汚染や関係する問題について学んだ。
- c. PY及び地元青年はこれらの時間を通じて交流し、各自の国での実践的な行動について意見交換をした。

- d. グループで昼食をとることによって、両者は自国の文化を共有することができた。

#### グループ・ディスカッション IV

##### ねらい

- a. ベトナムでの課題別視察の振り返りを行う。
- b. 兵庫行動枠組と仙台防災枠組から得た学びについて認識する。
- c. 日本及びASEAN各国における防災の努力や災害救助事業をまとめる努力から得られた教訓について議論する。
- d. どのように安全を確保するかなどにつき、芸術的な手法で災害について表現できるようになる。

##### 活動

- a. 1人の自発的なPYがグループ・ディスカッションIIIの要約を行い、要点をおさえた。
- b. 6人ごとのグループに分かれ、兵庫行動枠組と仙台防災枠組から得た学びについて議論した。PYはこれらの枠組に見られる学びを順番に共有していった。
- c. ファシリテーターは、これらの学びを要約し、PYがこれらを血肉化できるように簡単な説明と事例で補った。
- d. 東日本大震災の教訓に関するビデオを視聴した。そしてここでの教訓につき議論し、また個人課題3を用いて自国で得られた教訓についても共有した。
- e. アイスブレイクがシンガポールPYの主導で行われた。
- f. PYはグループに分かれ、国際的な教訓と日本及びASEAN各国における教訓の両方を用いて、自ら選んだ任意の災害からどのように自身と家族と家屋の安全を確保するかにつき絵を描き発表した。各グループは自らの図画について他のグループに対し説明を行った。
- g. 1人の自発的なPYがセッションの総括を行った。

##### 成果

- a. 兵庫行動枠組の過去10年間で得られた教訓につき議論し、防災とは、将来の損失に対して費用効率の高い投資であると学習した。兵庫行動枠組はそれを達成するための重要な道具であり続けた。また、反復的な小規模で遅発性の災害が地域や家庭、そして中小企業に及ぼす影響こそ全損失の中で最も高い割合を占めることが分かった。
- b. 災害を予見し、対策を立て、防災することが緊急かつ不可欠であることを学習した。潜在する災害リスクの根幹への対処にもっと注力する必要がある。その目標は、「より良い復興」（ビルド・バック・ベター：災害発生後の復興段階において、次の災害発生に備えて、より災害に対して強靱な地域づくりを行うという考え方）であるべきだ。
- c. 気候変動は災害リスクの根幹の一つであり、これへ

の対処は有意義で明解な方法のもとに災害リスクを減少させる機会であると学んだ。

- d. 災害リスクに対して、より広範でより人間中心の予防措置が取られ、最も被害を受けやすい者が参画する機会を与えられるべきだと学習した。
- e. 東日本大震災や台風Haiyan（ハイエン）（平成25年台風第30号）の教訓について知識を深めた。例えば、テディベアなどを被災者に届けるより、被災地で信頼される組織に直接物資や現金を寄付した方が望ましい、などである。遠隔地は災害リスクに対し最も脆弱であることから、更なる注意が向けられるべきである。
- f. 個人課題3の結果を共有したことで、洪水、地震、地球温暖化、台風や噴火といった様々な災害についての教訓に関し知識を得ることができた。例えば、洪水については、PYは以下のような活動を提案した。移動方法を啓蒙し、予行演習をし、学校において防災の授業を行い、洪水に関する意識を喚起し、避難管理計画を策定し、植林を促進させる。
- g. 日本及びASEAN各国、また国際コミュニティからの教訓をポスターにまとめることができると学んだ。この活動では、災害を表現するためにPYの創造力が発揮された。
- h. 「怖がらず、備える」べき、という災害へのスローガンをPYは考え出した。

#### グループ・ディスカッション V

##### ねらい

- a. 第43回「東南アジア青年の船」事業におけるディスカッション活動のテーマを再確認する。
- b. 防災及びもしくは災害救助における青年の役割についてPYが企画し提案した運動について議論する。
- c. プロジェクトの企画と実施について役立つ秘訣をPYに紹介する。
- d. キャンペーン・ポスターに基づきプロジェクトの企画書を下書きする。

##### 活動

- a. 1人の自発的なPYがグループ・ディスカッションIVの要約を行い、要点をおさえた。
- b. ファシリテーターはPYに対して、第43回「東南アジア青年の船」事業の中核的な使命が、青年の社会活動への参加を促進することだと想起させた。
- c. 国別課題として制作されたポスターを用いて3分間のプレゼンテーションを準備し、その後PYは自らの社会貢献活動に関する計画につき、質疑応答を行った。
- d. ファシリテーターは、プロジェクトの企画と実施に関する自らの経験や教訓、秘訣をPYに対して共有した。
- e. PYは見本となるプロジェクト企画書の定型を紹介され、国別課題のポスターからプロジェクトの企画書

を作り上げるよう求められた。

- f. PYは自らのプロジェクト企画書を発表し、DGの仲間から建設的なフィードバックを受けた。
- g. ファシリテーターは、キャンペーン・ポスターを改善する相談のためにDGセッション外で国別にミーティングを設定した。これは、キャンペーンの明確さ、活動の実現可能性、そのほか、PYが帰国した際のキャンペーンの実行を確実にするための視点、に重点が置かれたものである。
- h. 1人の自発的なPYがセッションの総括を行った。
- i. ファシリテーターは主に、DGの目的、5回のセッションで言及されたテーマ、そしてそれらとPYのキャンペーン・ポスターとの関連性に焦点を当てて、5回全てのセッションを総括した。

### 成果

- a. 第43回「東南アジア青年の船」事業が青年の社会活動への参加の促進を標榜しており、全てのディスカッション活動はこの目的を達成するための手段であることを思い起こした。
- b. 自国においての防災もしくは災害救助事業に対する青年の参加を促進させることについて、国別課題を共有した。
- c. 各グループは自らのキャンペーンに関する改善策について、DGの仲間から建設的なフィードバックを受けた。
- d. いかにか効果的かつ効率的に社会貢献プロジェクトを企画し実施するかについての秘訣をファシリテーターから得た。
- e. プロジェクト企画書作成の手ほどきを受けた。ファシリテーターは各国グループに対して、キャンペーン・ポスターを実現可能なプロジェクト企画書に昇華させるよう指導した。
- f. ファシリテーターは、プロジェクト企画書作成の過程において指導するため、11全ての参加国のグループとミーティングを設定した。各グループは、事後活動を見据えて提案した計画を改善するために、DGセッション外でファシリテーターとの付加的な時間を平均10分間与えられた。
- g. 以下はDG3によって提案された社会貢献プロジェクトの要約である。

#### フィリピン： Project R.E.A.D.Y.

青年を対象としたトレーニング・プログラムを通じ、青年が災害に対する心構えを持つことを目的とする。選ばれた30の地域からのボランティアが災害予測地図を作成し、潜在的災害の前、中、そして後においてまでも各自の地域で用いられるよう「ハザード・脆弱性・対処能力」(HVC) 評価方法を覚える。

#### ミャンマー： Stand against Flood (洪水対策)

学校や公共の場において洪水対策のポスターを貼り、

洪水多発地域で避難訓練を行い、洪水の被害地域へ出張し、植林し、洪水予防における樹木の重要性を啓蒙することによって、人々に対し何が洪水を引き起こし、その影響がどのようなものかについて知らしめることを目的とする。

#### マレーシア： It's Flooding. Are You Ready? (洪水だ、備えは万全?)

プロジェクトの目的は、洪水対策に対する世間一般の意識を向上させることである。これには3つの活動が含まれる。一つ目は、青年リーダーを対象とした洪水対策についてのワークショップである。二つ目は、ボランティアが洪水多発地域に洪水対策の装備を頒布することである。最後は、被災者を救うための洪水救急事業を実施する。

#### ラオス： Youth Hero (青年ヒーロー)

ラオスにおける青年の意識を向上させ、防災について青年の理解を深め、青年が自由時間を賢く使い、青年間の新しいつながりやネットワークの形成を目的とする。初めに、より多くの参加者や興味を示すボランティアに接触するためFacebookページを開設する。第二に、防災に関するポスターをデザインするキャンペーンを行う。最後に、復興支援活動に加わる。

#### ブルネイ： Awareness Raising on Flood and Landslides (洪水や土砂崩れに対する意識向上)

自然災害について地域に啓蒙して備えさせ、防災につき世間一般の意識と青年の参加を最大化することを目的とする。自然災害、植林、海辺の清掃について意識を向けさせる会話の場を設ける。

#### インドネシア Indonesia Flood Awareness Campaign (洪水に対する意識向上キャンペーン)

自然災害、特に洪水についての意識向上を目的とする。インドネシアにおける自然災害の43.8%が洪水によるものなのである。このキャンペーンは、植林、グリーン・ライフスタイル運動、早期防災教育、河川清掃を含む。

#### シンガポール： The Chill Movement (チル・ムーブメント)

シンガポールにおいて地球温暖化の悪影響について意識を向上させ、グリーン・ライフスタイルを取り込むことを目的とする。活動は、カヤックによる清掃、20 kgの空き缶収集、390 kmのサイクリング、植林、そして地球温暖化に関する公演である。5つの活動は、シンガポール人の習慣に根付くよう30日間以上にわたって行われる。

#### カンボジア： Flood Risk Management (洪水危機管理)

向かうべき安全な場所を識別し、協力してくれる地元当局との関係性を構築し、災害対策計画を策定し、地域全体を巻き込んだ防災訓練を行い、洪水の季節になる前に災害管理の教育的ワークショップを開催することによって、人々が洪水によるリスクの管理に関しより一層



知ることを目的とする。

#### タイ： A Young Preserver（青年による森林保全）

国の自然災害管理の一環として青年主導による運動基盤を創設することを目的とする。参加者は既存の森林の保全のために植林を行う。森林再生は、洪水、地滑り、大気汚染や干ばつの予防や減少に資する。

#### ベトナム： Roofs after flood（洪水被災地に家を）

洪水により甚大な被害を受けた、開発の遅れた山村であるラオカイ省ピンガン村の支援を目的とする。最初に、ボランティア及び発起人は、洪水被災者の家屋の立て直しのために資金調達キャンペーンを行う。第二に、自然災害に対する意識向上のためのワークショップを実施する。

#### 日本： Expedition of Your Own Cities（地元を知ろう）

大学生を対象として、対象地域での自然災害に関する実地調査や歴史学習により、地元における自然災害に関してより詳しく理解することを目的とする。

### D. 決意・期待される今後の活動

- a. ラオスPYは、“Youth Hero”（青年ヒーロー）プロジェクトが帰国後、確実に実施されることを計画している。その主目的は、日本及びASEAN各国における自然災害に関する新情報や、仙台防災枠組などの国際的枠組に関する情報が、ラオスの青年や各地域に共有されることである。青年ヒーロープロジェクトは、ソーシャルメディアによって既存の自然災害に対する一般大衆の意識を向上させ、ラオスにおける被災者支援のための募金を世間から集める。
- b. ベトナムPYは、提案された事後活動もしくはその他の取組によって、防災についての活動への関与により積極的になり、より責任を持つことを企図している。目標は、DGで学んだ事柄を他の人々に対して共有することである。
- c. マレーシアPYは、提案した事後活動を確実に実施することを強く決意している。プロジェクトが実施できるよう、マレーシアにおける関連団体の支援と協力を集める計画だ。自らの行動によって他のマレーシア青年が社会活動へ関与を強めることになるのを望んでいる。
- d. 日本PYは、DGで学んだディスカッション・スキル、チーム活動、社会貢献プロジェクトを企画・実施する能力を異なる側面で発揮させる計画だ。自分たちが提案した事後活動に参画するよう、自国グループの残りのメンバーを説得するつもりである。
- e. ミャンマーPYは、自らの社会に積極的に貢献するため、DGで得た知識を活かして、提案した事後活動で最善を尽くすつもりである。
- f. フィリピンPYは、帰国後、自国グループの残りのメンバーと共に実施する事後活動において、DGで得た

教訓を活かす機会を強く望んでいる。地域の中でも災害多発国として、フィリピンPYは防災を扱う事後活動が実施されるようにすることが重要だと考えている。目標は、フィリピンの立ち直りをより早くする一助となることである。

- g. カンボジアPYは、事後活動によって、プロジェクト対象地域における自然災害のリスクを減少させることを望んでいる。また、自らの活動や植林が環境に対してより長期的な影響を与えることができることも期待している。
- h. タイPYは、帰国後、事後活動プロジェクトがきちんと実施できるように、プロジェクトの企画・実施についてのセッションで得た能力を活用する計画である。
- i. ブルネイPYは、事後活動によって気候変動の影響に貢献することを望んでいる。提案したプロジェクトを実施するため、DGで学んだスキルを用いて支援の計画と調整を行う。
- j. インドネシアPYは、ASEAN の中でも災害多発国の一つであることを鑑みて、プロジェクトがきちんと実施されるよう事後活動においてディスカッションの成果を活用するつもりである。
- k. シンガポールPYは、提案された時間枠の中で成功裏に実施されるべく事後活動に修正を加えるため、DGで得たスキルを用いるつもりである。シンガポールPYは、提案したプロジェクトがシンガポール人に関わる防災とその他の環境問題に対する意識を向上させることに資すると信じている。

### E. 評価・反省（自己評価セッション）

- a. シンガポール  
洞察に満ちた議論及び共有セッションを通じて、防災と災害救助について自らの理解をより深化させることができた。シンガポールでは災害は一般的ではないが、DGで得た知識によって社会へ還元することができると信じている。
- b. インドネシア  
DGで才気と情熱に溢れた素晴らしい人々に恵まれたことは期待以上のものだった。ブレイクストーミング、議論、発表が毎回のディスカッション・セッションの活動であり、それによって自らの対人、議論、ファシリテーションのスキルが徐々に形成されていった。私は、演説能力を鍛え、人前で勇気を持って話ができるようになるために「東南アジア青年の船」事業に参加した。この目的は、親愛なるDGの仲間たちに囲まれて成功裏に達成された。
- c. ブルネイ  
ディスカッション活動に対して設定した目標は完全に達成された。毎回のDGセッションでは新しい事柄を学び、知識を深めることができた。設定した目標



の他に、DGの仲間たちと意見交換や共有を行うことで想定していた以上の知識を得ることができた。自然災害のリスクを最小化するための意識向上プロジェクトをどう企画・実施するかについても学習することができた。

d. カンボジア

防災や災害救助の概念について随分と理解を深めることができた今、目標の9割は達成できたと自信を持って言うことができる。カンボジアだけでなく日本及びその他のASEAN各国における自然災害に関連する問題を指摘できるようになった。そして最も重要なのは、ディスカッション・セッションを通じて、このDGにおける我が国のグループは、実現可能なプロジェクトを考案することができたことである。

e. タイ

まず、セッションは英語で行わなければならなかったことから、英語がより流暢になった。最も重要なのは、日本及びASEAN各国の文脈下で英語のコミュニケーションをすることがどういうものなのか学んだことである。これにより、より話すことについて自信を持つことができた。また、DGで得た結果をまとめ合わせ、発表する能力を身につけることもできた。概して防災は私の専門外だったが、ディスカッション・セッションでファシリテーターやDGの友人から学ぶ様々な機会に恵まれ、多くを得ることができた。

f. フィリピン

設定した目標は達成することができた。フィリピンでの災害救助及び復興支援に関するプロジェクト担当者としての仕事上の経験を、DGに共有する機会を得られたことが嬉しい。それだけでなく、他国や他の地域における特定の災害について、また日本及びASEAN各国における防災や復興支援で得られた成功事例や教訓について、ファシリテーターや他のPYから学ぶことができた。

g. ラオス

目標の8割は達成できたと言えるだろう。まず、私は防災と災害救助について全くの門外漢だった。そこで当初の目標はディスカッション・セッションに来て学び、共有し、新しい知識を得ることだった。DG3に参加することで、私のものの見方や認識は大きく変わり、それによってどうやって自らの弱みを克服し、自信を伸ばすかが分かった。

h. ミャンマー

DGに参加する前、経験や知識を他のPYと共有することで、日本及びASEAN各国における自然災害について、より多くを学びたかった。そして、DGのセッション中になされたことは、まさにそれらだったのだ。

i. 日本

各国の自然災害と人々の意識について深く理解することが目標だった。このトピックについては私は門外漢であった。他のPYとの議論を通じてASEAN各国における自然災害と人々の反応につき学ぶことができた。

j. マレーシア

毎回のDGセッションで新しい学びを得て、他のPYと意見交換するという私の目標は9割5分達成された。また、人前で、特に普段接していない人々の面前で話することに自信を持つことができた。

k. ベトナム

DGテーマについて知識を得たばかりでなく、他国のPYとの幅広いつながりを得ることができた。チームでの振舞い方や、意見交換の際にチームの仲間をいかに尊重するかを学んだ。ボランティアの仕事により自信が付き、よりやる気が湧くようになった。さらに、プロジェクトの企画では、いかに理論を現実に移すかについて学習することができた。

## F. ファシリテーター所感

過去10年間、既参加青年、ファシリテーターやナショナル・リーダーの友人たちを通して「東南アジア青年の船」事業について聞き及んでおり、日本及びASEAN各国からの極めて優れた青年たちのためにDG3をファシリテートする機会を与えられたことは、非常に光栄で名誉なことだった。これについて、日本政府内閣府並びにSSEAYPインターナショナル・カンボジアに対し、この責務につき私を信任して下さったことを心から感謝申し上げたい。また、DG3の運営を可能にして下さった管理官、副管理官、主任、そして全ての管理部員の皆様に対して御礼申し上げたい。

8月のファシリテーター会議が、第43回「東南アジア青年の船」事業の共通目的やテーマの下、何を目的や目標として私のDGが注力すべきか明確にしてくれ、既参加青年でない私にとってありがたかった。また、共に仕事することができ、私の学びとなった他の7人のファシリテーターたちと出会って交流できたことは非常に良かった。

第10回「日本・ASEANユースリーダーズサミット」(YLS)のセッションにおいて、実行委員に対するアドバイザーとしてファシリテーターが関わることができて嬉しかった。私のDGについたYLS実行委員はセッション中、実に素晴らしい働きをしてくれた。私は全てのYLSセッションに参加したが、船内におけるディスカッション活動前にPYについてよく知ることで、このDGのPYの様子を観察することができた。

私のDGでは、全てのPYが事前の個人課題と国別課題を設定した期日までに提出した。私は各PYまた各国グ